



Title	資料 2いわゆる「70年構想」から教授学研究の構想
Author(s)	教授学研究グループ
Citation	教授学の探究, 3: 128-129
Issue Date	1985-03-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/13528">http://hdl.handle.net/2115/13528</a>
Type	bulletin
File Information	3_p128-129.pdf



[Instructions for use](#)

いる。

(進藤省次郎)

## <資料> 2

いわゆる「70年構想」から

### 教授学研究の構想

教授学研究グループ

1970. 2. 7

#### 1 対象領域と課題の設定

教授学の概念規定は、現在まだ必ずしも明確ではない。

- ソ連では、教授学を「陶冶と教育の理論」としている。
- 東ドイツのクラインたちは、教授を陶冶と訓育の統一的過程とみなしたうえで、教授学を「教授の一般理論」であるとしている。ここで「陶冶」は、科学の基本知識や能力の形成を意味し、「訓育」は道徳や人格の形成を意味する。
- 日本では、陶冶・訓育・教授ということばはあまり使われないで学習指導・生活指導ということばが一般に使われている。しかし生活指導の概念をめぐってそれを教科外の指導に限定するか、教科の指導にもふくまれるものとするかについては論争がある。

このような事情をふまえてわれわれは、教授学を一応次のように規定しておく。『教授学とは、学校教育学の一部門として、教科指導の内容と方法にかんする一般的理論を追求する科学である』

教授学の概念規定をいじくりまわすことはあまり生産的でないが、この規定の積極的意味は、教科指導の内容と方法にかんする一般的理論を確立することなしに教授学は科学となりえないことを明確に表現しているところにある。

教科指導の理論として規定された教授学の対象領域は、大まかに次の二つにわけられる。

##### (1)教科内容編成

##### (2)授業、教授—学習過程

これらの2領域ごとにそれぞれいくつかの課題を設定することができる。

##### (1)教科内容編成における課題

- ① 学校の教科課程全体の性格や構造を明らかにすること  
(教科課程編成論)
- ② 教科の系統性あるいは教科内容編成の基本原則を明らかにすること
- ③ 教材の選択・配列の原則を明らかにすること

##### (2)授業(教授—学習)過程における課題

- ① 授業の一般目的や課題を明らかにすること
- ② 教授—学習過程と認識の発達の法則性を明らかにすること
- ③ 授業における訓育の本質を明らかにすること

#### 2 研究の方法

科学としての教授学は、実際の授業をつくりあげるのに具体的指針を与えるものでなければならない。そのような教授学を確立するには、教科教育論の完成が前提条件であるが、完全な、すべての教科教育論の体系ができあがることは必ずしも必要ではない。

1 にあげた課題のなかで(1)―②, ③, (2)―②を解明できるいくつかの教科教育論が確立してい

れば、科学としての教授学の骨格をつくることができるであろう。

われわれは、このような観点から、さしあたり、戦後の民間教育運動の中で、いちじるしい成果をあげた教科及び子どもの正しい世界観の形成に不可欠と思われる主要教科をとりあげて、これらの課題に迫ろうとしている。

われわれがとりあげた教科は、国語、数学、理科、社会の4教科である。

これらの教科指導の内容に切り込む際、次の2点にとくに努力を集中することにする。

- (1) 指導体系がほぼ確定した部分（ほとんどすべての子どもに科学的概念を形成することに成功した部分）をとりあげ、全面的に分析し、成功の要因をあばき出し、それらをできるだけ一般化すること

国語では文字の指導体系

算数では、数の計算体系、外延量の指導体系

理科では、重さや力の指導体系

- (2) 教科教育論のなかで、まだ確定していない中心部分に切り込み、その部分の指導体系を確定する作業をやりながら、教科指導の内容と方法にかんする一般的法則を抽出し、かつその有効性を検証すること

国語では、文法の指導体系

算数では、内包量や関数の指導体系

理科では、エネルギーの指導体系

研究を具体的に進めるにあたっては、徹頭徹尾実験的手法を貫くことにする。

実験の手続はおよそ次のような順序に従う。

- ① 現代科学の体系に沿った教科の系統をふまえ、研究対象とする概念（教育内容）についての授業の到達目標を明らかにする。その際、科学史的知見と子どもの認識発達の法則を考慮する。
- ② 教育内容の本質をもっともよく体現した教材を選定し、授業過程の指導プランを作成する。その際、同時に教授学的法則についての仮説を設定する。
- ③ 子どもの既成概念を調査（事前テスト）する。
- ④ 実験授業を実施し、資料を作成する。
- ⑤ 授業終了後に、目標に対する達成度を評価し（事後テストなど）、80%～90%以上の子どもが完全に授業の目標を達成したときに、その指導過程が一応確定したものとする。
- ⑥ 同時に仮定された教授学的法則が一定の度合で検証される。